

*壺井八幡宮：古い町並みが残る静かな住宅地にある。大阪みどり百選に良ばれており緑が美しい。そのシンボルは幹まわり7m樹齢千年の巨木だ。ここはかつて「香呂峰」と呼ばれた小高い丘にあり、「河内源氏」発祥の地、館を築き河内を支配した。またこの八幡宮には2種類の御朱印が存在し、初穂料はどちらも500円。近くの駒ヶ谷駅付近には、楠木正成の首塚のある杜本神社や日本で初めて大黒天を祀った大黒寺がある。

*河内源氏三代：初代は源頼信(河内守)2代目は頼義(前九年の役で勝利)3代目義家(後三年の役で勝利)。河内に勢力を広げるきっかけになったのは、1051年から始まった前九年の役。頼義は、朝廷と対立した阿部一族の鎮圧に失敗した前陸奥守の後任として、戦いを繰り広げ、10年以上の歳月を費やし勝利。役後の1064年、香呂峰の館の隣に河内源氏の氏神である石清水八幡宮を勧請。これが壺井八幡宮の創建とされている。(現在の社殿は、徳川綱吉の命により1701年柳沢吉保が創建)。また、香呂峰という地名が「壺井」となったのは、大干ばつでの飲み水不足解消の逸話に由来する。(壺井水) 1083年東北地方で再び争いが勃発。原因は前九年の役で源頼義に味方した清原氏の家督争い。源義家は陸奥守として内紛を鎮めるために介入。後三年の役が始まる。義家は鎮圧したが、朝廷からは私闘扱いにされ恩賞はでなかった。これに対して義家は私財を投じ戦った者に報いたため、名声がひろまった。義家の死後親族内で内輪揉めが勃発。その影響で河内源氏の有力者が関東に移住してしまった。その後義時が河内の領地を継承。八幡宮に権現社を築き祖廟とする。以後源氏は一旦平氏により肅正されたが、その後義兼が頼朝の配下として戦い「河内随一の源氏」と称されるほど大活躍、鎌倉幕府において河内を取り戻す。その後義兼の子孫は「源」から「石川」と改名し、鎌倉幕府の御家人として南河内を支配すると楠木正成らの勢力に圧迫され河内源氏は衰退。多くの一族は関東へ逃げ延びた。歴代政権である足利氏や徳川氏は河内源氏の末裔と称したため、河内源氏三代は河内源氏の始祖とされ、歴代の権力者に敬われてきた。3人は河内源氏の菩提寺通法寺近くの墓に眠っている。

*叡福寺：河内三太子という聖徳太子に関係の深い寺(叡福寺、野中寺、大聖勝軍寺)の一つ。聖徳太子は用明天皇の子として生まれ、推古天皇の摂政として多くの業績を残した。寺伝によれば始まりは太子没後伯母に当たる推古天皇が土地建物を寄進し、墓守の住む堂を建てたこととされている。そして奈良時代の724年に聖徳太子の追福のために聖武天皇により大規模な伽藍が造営されたとされる。だが、聖武天皇創建説には異論が多く、実際には太子信仰の高まりと共に平安後期に創建されたと考えられている。いずれにしても、叡福寺は境内にある聖徳太子御廟を祀る寺であり、法隆寺や四天王寺と並んで太子信仰の中心をなす寺である。太子の忌日を偲んで行われる、毎年4月11日・12日の大乘会式は「太子まいり」として多くの人で賑わう。寺は一時織田信長の兵火により全焼、豊臣家により再興された。石段の上には左右に金剛力士像が睨みをきかす南大門が建つ。境内の真正面が聖徳太子の御廟。通常、寺は正面に本堂・金堂などが建つが寺の中心線は

あくまでも聖徳太子御廟で、その左右に伽藍が配置されている。南大門の左側、境内の西側に多宝塔金堂、精霊殿が並ぶ。多宝塔には釈迦・文殊・普賢の三尊像と大日如来が安置されており、金堂は止利仏師作の如意輪観音を本尊としている。精霊殿には聖徳太子16歳像が本尊として祀られている。日本仏教の祖ともいべき聖徳太子の墓所があることから、過去に最澄、空海、親鸞などの僧も参籠している。

*用明天皇陵：宮内庁治定「用明天皇 河内磯長陵」で春日向山古墳ともいう。東西67m、南北63m、高さ10.5mの3段からなる方墳。今まで天皇陵といえば前方後円墳だったが、方墳が取り入れられた。推古天皇陵の山田高塚古墳、蘇我馬子の石舞台古墳と方墳が採用されている。これが蘇我氏の墓制といわれる。用明天皇は太子の父で欽明天皇の第4皇子。母は蘇我稲目の娘堅塩姫。蘇我氏の血を引いた最初の天皇で在位2年(585年～587年)と短期間で磐余池辺双槻宮で死去。短命のため業績は少ないが、歴代天皇の中で初めて仏教への帰依を表明したことで知られている。その意志は、推古天皇・聖徳太子などの蘇我系に引き継がれ、排仏派の物部氏との争いに発展していく。近くに「伝蘇我馬子塚」といわれる珍妙な多層塔がある。権勢を誇った馬子の墓にしてはお粗末な塚で真実は定かではないが、この地が蘇我氏と縁深いということを表しているといえる。

推古天皇陵：宮内庁は「推古天皇 磯長山田陵」に治定し管理している。山田高松塚古墳と呼ばれ、東西に長い3段築成の長方墳・周囲に7mの空濠を巡らしてあり、濠の外堤までを含めると一辺が100m。内部には二基の横穴式石室をもつ合葬墓であると考えられている。推古天皇は554年、第29代欽明天皇と堅塩姫との次女として生まれ、名を額田部皇女(ぬかたべのひめみこ)といった。576年23歳の時、異母兄にあたる第30代敏達天皇の皇后となり、二男5女をもうける。585年、敏達天皇が当時流行した天然痘で逝去。皇位継承で意見が対立。額田部皇女はまだ若年の竹田皇子を将来皇位につけるべく蘇我馬子と組み、実兄の橘豊日(たちばなのとよひ)擁立を計る。それが第31代用明天皇である。病弱だった用明天皇は2年後病死。そこで馬子と額田部は凡庸な人だったといわれる泊瀬部皇子を、中継ぎ天皇として587年即位さす。崇峻天皇の誕生だ。ところが次期天皇と思っていた竹田皇子が早死し、592年崇峻天皇が暗殺されるという前代未聞の不祥事起こる。そしてその後再三の辞退にもかかわらず、群臣に乞われ、593年第33代推古天皇として即位することになる。日本最初の女帝で39歳だった。聖徳太子の叔母にあたり、太子を摂政として蘇我馬子と共に政治を行った。大陸の随との交渉により、先進的な政治制度や文化・芸術を積極的に吸収し、政治改革や仏教文化を中心とした、飛鳥文化を開花さす。

二子塚古墳：方墳を2つ組み合わせた双方墳という珍しい形式の古墳。全長61m、幅23m、築造期は7世紀後半。「ふたご」の名のとおり、それぞれにほぼ同じ形、同じ大きさの横

穴式石室と家形石棺が残されている。すでに盗掘されているため遺物は一切検出されていない。昭和31年所有者が個人の保存には限界があると「古墳売ります」の新聞広告を出し話題になった。文化庁と太子町がお金を出し合って購入し、現在は町が管理所有している。国の史跡に指定されている。地元では古くから、推古天皇と竹田皇子の合奏陵ではないかとされてきたが、推古天皇の墓にしては小さすぎるだろう。

科長神社：延喜式内社で由緒ある神社。もともとは二上山にあり二上権現と称していたが、鎌倉時代1238年この地に遷座したとされる。祭神はイザナギノミコトの子とされる級長津彦命(シナガツヒコノミコト)と級長津姫命(シナガツヒメノミコト)。他に六神が合祀されている。俗に「八社明神」と呼ばれている。社宝は神功皇后が使用したと伝える小さな兜。

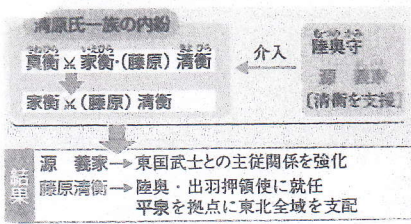
小野妹子の墓：科長神社右手の「大阪みどり百選」に選ばれている121の石段を登ると中央に柵で囲われた墓塚がある。径50m高さ10mの墳墓とされるが、実際は高さは2～3mほど。地元の人々は「いもこさん」と呼んでいる。小野妹子は琵琶湖西岸の近江国志賀郡小野村で生まれ育つ。推古天皇15年(607年)大礼(だいらい)という冠位に抜擢され、遣隋使節の大使に任命される。聖徳太子から預かった隋皇帝煬帝にあてた国書を持って難波津から船出。2年後の推古天皇17年、妹子は裴世清の一行12人を連れて隋より帰朝。隋との国交を開くことができた。その功績により大徳冠に昇った。この小野妹子の墓は、京都の生け花家元池坊家が管理している。聖徳太子の守り本尊の如意輪観音の守護を太子から託された妹子が、坊を建て朝夕に仏前に花を供えたのが池坊流の起源としているからである。そのため有名になり観光スポットに。だが小野妹子の出身地の志賀町の「唐臼山古墳」が実際の墓と有力視されている。妹子の功績を考えるとこの科長谷にあるのが相応しいのかもしれない。

孝徳天皇陵：王陵の谷最後の王墓で宮内庁が「孝徳天皇 磯長陵」に治定し管理している。「山田上ノ山古墳」で、別名「うぐいすの陵」とも呼ばれている。径32mの円墳。この孝徳天皇は「悲憤のうち薨去」「哀れな末路」「失意の内に病死」の見出しが付けられる。第35代皇極天皇の代、645年飛鳥板蓋宮で起きた乙巳の変で蘇我宗家が滅び、女帝皇極天皇は退位。有力者に皇位を譲ろうとしたが誰も引き受けようとせず、実弟の軽皇子が天皇位に押し上げられ、第36代孝徳天皇として即位(在位645年～654年)。足が不自由で、気弱で凡庸な性格であったため、天皇の器にあらずと断るも押し切られてしまった。既に50歳の老人であった。大化の改新で人心を一新するため難波長柄豊崎宮に遷都したが、実権はクーデターの首謀者中大兄皇子(後の天智天皇)や中臣鎌足が握り、「大化の改新」と呼ばれる改新政治では蚊帳の外に置かれた。ところが、8年後の653年反対する天皇を難波に置き去りにし、夫人の間人皇后(はしひとこうごう)、皇極上皇、中大兄皇子らは

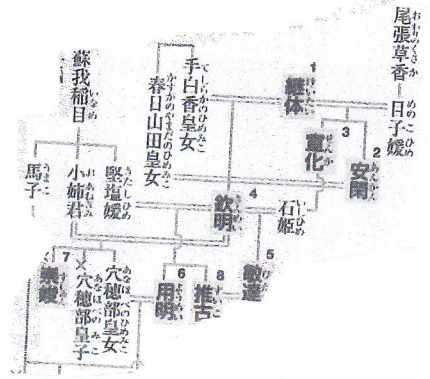
公卿大夫・百官らを引き連れ、ようやく造営が終わったばかりの難波宮を捨て、飛鳥の河辺行宮に戻ってしまう。難波に置き去りにされ、悲痛のあまり病に倒れた孝徳帝は翌年59歳で薨去する。蘇我氏滅亡後なのに、飛鳥と離れた蘇我系の王陵の谷に埋葬された。そのような意味で悲運の天皇といえる。

飛鳥戸神社：上ノ太子駅裏に飛鳥戸神社と観音塚古墳がある。小さな神社で狭い境内だが、この付近は五世紀末雄略天皇の時代、昆支王(こんきおう)という百済の王族が渡来し、大和朝廷からは後に「飛鳥戸郡」と呼ばれるようになる土地を与えられ土着した。その子孫が飛鳥戸造(あすかべのみやつこ)であり、昆支王を一族の祭神として祭祀していた。現在はスサノオノミコトが祭神。

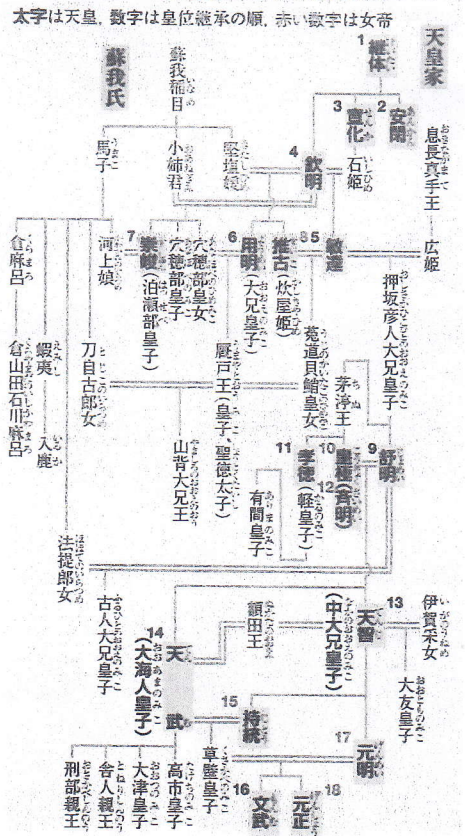
後三年合戦関係図



- | 武烈 | 継体 | 安閑 | 宣化 | 欽明 | 敏達 | 用明 | 孝徳 | 推古 |
|-------------|-------------------|----------|--------------|-----------------------------|--------------|--------------------------|---------------|----------------------|
| 507 | 512 | 517 | 527 | 528 | 538 | 540 | 552 | 562 |
| 大伴金村、蘇我氏を倒す | 大伴金村、加耶王(聖徳太子)を倒す | 筑紫国造蘇我の乱 | 物部麻呂、磐井の乱を鎮圧 | 百済の聖(明)王、仏像と経論を献上(552年説もあり) | 大伴金村、加耶問題で失脚 | 蘇我馬子と物部尾真、崇仏論争、新羅が加耶を滅ぼす | 蘇我馬子、飛鳥寺造営を開始 | 蘇我馬子、東漢直駒に崇峻天皇を暗殺させる |



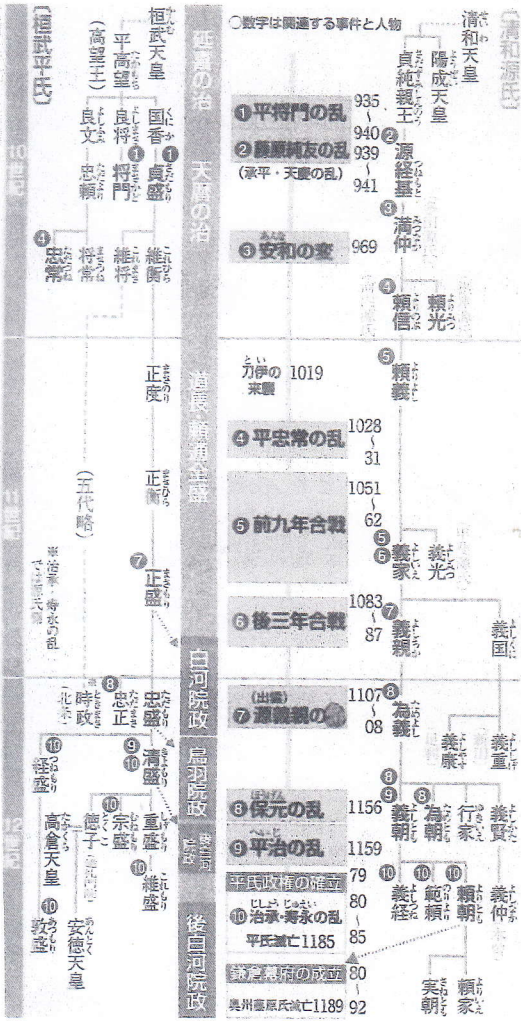
天皇家・蘇我氏の関係系図



推古朝関係年表

- | | |
|-----|------------------------------|
| 562 | 推古天皇即位 |
| 563 | 厩戸王(聖徳太子)、推古天皇の政を摂る |
| 564 | 厩戸王、難波で四天王寺建立を開始 |
| 594 | 三宝(仏教)興隆の詔 |
| 600 | 第1回遣隋使を派遣 |
| 601 | 厩戸王、斑鳩宮をつくる |
| 602 | 百濟僧圓徳、曆本・天文地理などの書を伝える |
| 603 | 冠位十二階を制定 |
| 604 | 鄴法十七条を制定 |
| 607 | 小野妹子らを隋に派遣 |
| 608 | 斑鳩に法隆寺を創建 |
| 608 | 小野妹子、答礼使雲世清とともに帰国 |
| 610 | 妹子を再び隋に派遣。高向玄理・曼・南淵請安ら同行し、留学 |
| 610 | 高句麗僧曇徴、紙・墨・絵の具の製法を伝える |
| 614 | 大七御田敏らを隋に派遣 |
| 618 | 隋滅亡し、唐建国 |
| 620 | 厩戸王、蘇我馬子とともに天徳記(国記) |
| 621 | 臣連伴造造造八十部并公民等本記を著す |

源氏と平氏



前九年合戦関係図

